

新装版

谷間の花が

近代建築史の断絶を埋める松本與作の証言

見えなかつた時

伊藤ていじ著

彰国社

装丁：宇那木 孝俊（ウナデザイン室）
DTP編集：タクトシステム

目次

まえがき	9
五月二十五日	16
失われたドーム	21
生き証人として	25
その生い立ち	29
上京のぼんちゃん	30
造家から建築への頃	33
どんなもんじゃ	40
木子家に寄宿	45
輸入工学の補完	52
進学のおすすめ	57
築地の工手学校へ	61
中堅工手の役割	68

中央停車場時代……………75

辰野金吾との出会い……………76

日吉町の事務所……………81

八重洲の事務所……………88

停車場建設計画……………94

掃きだめの役……………98

エレファントと薄美濃……………102

コンクリートは不安……………108

手さぐりの構造設計……………113

大林芳五郎上京……………119

絵草紙か現寸図か……………123

停車場の完成……………128

第一相互館時代……………133

用のある男……………134

日本一の建築家……………138

高さは企業のシンボル……………144

中堅工手の役割……………149

現場監理主任へ……………155

八阪丸撃沈さる……………162

非情の立ちまわり……………166

請負業の論理……………174

ほうろく煉瓦……………179

信頼なければ……………183

直営工事に変更……………188

社長が社長を……………193

栄光の解体式……………198

辰野金吾の置土産……………203

嫁取りの話……………204

京都で見合い……………209

「朝」と「萌黄」……………212

明治の巨星墜つ……………	215
自動車で新婚旅行……………	219
船長なき船から……………	222
春洋丸出航……………	226
シカゴでの発見……………	230
ヨーロッパ周遊……………	235
ウィーンの森……………	240
関東大震災発生……………	244
第一相互館の復興……………	248
様式の集大成……………	254

第一生命館時代…………… 259

有楽町一丁目九番……………	260
矢野恒太のメモ……………	263
立面のみのコンペ……………	267
松本案の立面……………	272

淀橋の常円寺へ……………	275
渡辺仁の参加……………	279
建設部の組織化……………	283
木田保造の登場……………	289
深礎工法の採用……………	293
潜函工法の決意……………	300
地下は四階に……………	305
馬鹿な計画を……………	310
実費精算式の施工……………	317
耐爆・耐弾構造を……………	326
工事の進捗……………	332
終身の顧問技師……………	336

あとがき…………… 345

松本與作さんは昭和五十七年で満九十二歳になられる。この方の存在については一部ではよく知られているが、通常の近代建築史のなかではほとんど語られることはなかったといつてよい。それには理由がある。明治以来おびただしい建物が建てられてきたけれど、主として建築エリートの間で語られる資料として語るのが、少なくとも今までの近代建築史の主流だったからである。もちろん、それはそれなりに評価されるべきものを多くもっていることを否定するつもりはない。ただし片手落ちであるのも事実である。

思うに明治時代の建築エリートとなった大部分の人たちは、中級武士階層かさなければ地主階層の出身である。もちろんそうなる経済的条件と人脈とに恵まれていたこともあるが、そのほかに次の三点があげられよう。第一に彼らの家は、江戸時代の幕藩体制下にあつてはミドル・クラスに属し、官僚組織のなかで訓練をうけ事実上の決定権をもち、国家の次元で発想することを知っていた。第二に、彼らは主として儒教または仏教に根ざしていたのであるが、人間道徳と社会道徳をわきまえ精神的には誇りをもって行動していた。第三は西欧の物質文明や制度にコンプレックスを抱き、決して中華思想に類する独善を持ちはしなかった。このことは西欧の物質文明や諸制度の導入に謙虚であったことを暗示している。

しかし松本與作はその系譜の外におかれていた。これは率直に認めなければならぬが、だからといって彼はわが国の建築界のメカニズムの中で、なくともよい歯車であったわけではない。彼はわが国最初の建築家である辰野金吾に師事したが、その辰野金吾という建築エリートでさえひとりではエリートとして活躍することはできなかったのである。文楽のように、顔を隠してはいるけれど、人形を操りその運命を決する黒子のような存在もまた必要であったといつてよい。もちろん私は、辰野金吾が人形だと言っているのではない。そういうことは全くないし、彼が偉大なる存在であったことは紛れもない事実である。

しかし歴史はひとつの史観をもって書きおろされるものであり、その意味では創られるものであり、そのもとになる根本資料でさえしるべき故意の過失を含ませている。皇居の濠はたにそびえ立つ第一生命館は、被占領時代の支配の中心であるが、その正面人口の右側の壁に一枚の金属の銘板が張りつけてある。そしてその設計者として渡辺仁と松本與作の名前が陽刻されている。これを見てごく素直に解釈すれば、この建物の設計者はこの両名ということになる。近代建築史の本とか年表をみると、設計者はこの両名とするか、さもなければ渡辺仁一人だけとなっている。渡辺仁だけの名前となるには理由がある。連名において渡辺仁が先に出ており、そのうえ東京帝国大学出身で帝室博物館（東京国立博物館）設計の高名の建築家であるのに対して、松本與作は現在の各種学校に相当する工手学校の卒業生で一介の営繕課長にすぎないからである。

果たして建築の歴史の中で、そのように書かれてよいものであろうか。私たちはひとつの銘板という資料でさえ、社会的背景をぬきにして語ることはできないことをこれは示している。私は松本與作さんの証言を通して二つのことにふれたかった。ひとつはもちろんその証言をできるだけそのままに記録して、いくらか私なりの解釈と評価を加えることである。他のひとつは松本與作さんという人物を通して、わが国の近代建築世界のなまぐさい実体のひとつの側面を垣間みただけなのである。私は今まで何人かの建築家について書いたことがあるけれど、最も人間くさくて肝腎なところは省略せざるをえなかったのがしばしばであった。それにふれることがその人の人格を傷つけることにならず、むしろたくましいエネルギーの表現だと思っただけで、他人は必ずしもそうは思わず誤解するに違いないと考えたとき、私は表現を省略するか変えなければならなかった。

2

わが国の近代建築史の成果にかかわらず、僭越^{せまろ}ではあるが私が不満に思うことがいくつかある。そのひとつは、実体としての日本建築の歴史は連綿として続いているにもかかわらず、明治維新の時点を境として、建築史は日本建築史、西洋建築史、近代建築史に分断されていることである。西洋建築史は近代に及ぶことはないし、日本建築史は江戸時代でもって終わることになっていたし、近代建築史が現在を語ることはないから、明日の姿を描くことはない。

私はひとりの建築史家として、その三者の体系化のむずかしさを知る。しかしたとえそれがむずかしくても、その三者に橋をかけることなしには、奇妙な分断が統合される日はこないであろう。ただはっきりしていることは、明治時代にあつては日本の伝統と西欧的近代との間に断絶があつたという事実である。西洋建築学は西洋で生まれ西洋で育ち、武力と政治的恫喝^{ごうかく}を背景にして鎖国日本に導入

されたとき、この断絶の存在は当然であったといえよう。したがって日本的伝統と西欧的近代との断絶という谷間のなかで、もがき苦しむ人なくしてはこの三者の間に橋をかけることはありえない。分断されたものは統合されていったと言に言う人があるかもしれないが、血も涙も喜びもある葛藤なくしては埋めることができなかったことを、体験でもって知っている人のひとりがこの松本與作さんである。私はそういう人たちを好意をもって注目したいと思う。そしてエリートを主体とする建築史は、こういう人の存在を無視して、本来は書きえないものだと私は思う。

およそ明治時代のわが国の建築エリートの役割は大別して三つあったと思われる。第一は明治政府の官僚機構の中に組織化され、不平等条約にあらわれている不利な国際政治的条件を改善し、あわせて国内の人心を統一する物的施設を建設し、中国におけるアヘン戦争にみられる武力侵略を斥けられるような富国強兵の実をあげることである。第二は近代という社会分業の時代に新しく生まれてきた形式の建築（官公庁・停車場・兵舎・学校・監獄・病院・博物館・事務所など）をわが物として身につけ造ることである。実際のところ明治以前にあった建築は、住宅と宗教建築（社寺）の二種類であり、学校といふ商家といふ幕府などというところと所詮はこの二種類の範囲内に属していた。第三は建築の設計・管理・施工・保守についての科学的思考法を身につけ、自らの力で開発を進めていく能力を定着させることであった。近代以前にあったわが国の建築技術は、仏教建築専入といったような形で、外発的進歩を一時的にとげることがあっても、そこにあったのは本質的に改良・応用し欧米の技術的、社会的レベルの先端に到達し、要するに变化させることにすぎなくて、前の技術を克服して本来の独自の技術を開発したり、革新的な原理を發明・発見させるようなものではなかった。

かくして明治政府は、たしかにエリート教育を行ってきた。しかしそのエリートの数はあまりにも少なかった。建築関係唯一の高等教育機関が明治十二年以後十年間に卒業させた学生は、わずかに二十二名であった。しかも第一回の卒業生の辰野金吾たちは、すべて、卒業後官庁で働くことを義務づけられた給費生であった。これらのことは本文でふれているので、ここではこれ以上述べないが、今日のわが国にはエリート教育をする大学・学校はまずないといってよい。あるのは、エリートに必要なエスカレーターをもった大学である。要するにエリート大学はあっても、エリート教育はいつの間にかわが国の教育制度のなかでは失われてしまったようにみえる。それが大衆化された社会におけるあり方の一般論として好ましいものであるのか否か、私は問わない。ただ明らかかなことは、今日でもなお何らかの形でそれを必要としていることだけは指摘しておこう。そしてこうした建築エリートに必要な資格は、特定の専門についての優れたスペシャリストであると同時に、相矛盾したものを総合的に把握し、評価を加え、意思決定の方向を指示し、構想計画をたて、先見性をもった決断をもってマスター・プログラムに沿って実行に邁進できる、視野の広いジェネラリストでもあることである。とすると、この本から察していただきたいことのもうひとつは、建築エリートの心がけの足しになるようなことであったといつてよい。

3

大衆化された今日の社会にあっては、このような視点はナンセンスという人がいるかもしれない。戦後のデモクラシーは、自ら獲得したというよりは與えられたものであったためか、なんといつても

そこには甘えや虫のよさがあることは否定できない。

この証言のなかに一部あらわれているような建築界のなまぐさく苛烈な戦いのなかで身につけた合理的利己主義とかプラグマティズムこそ、より道徳的、より建築の真実に迫るように私にはみえる。格好のよい建築家や景気のよさそうな業者の姿が事実であるとしたら、その逆の姿もまた紛れもなく事実であるが、そうしたなかに建築や建築界の基礎があるとは私は信じない。

たとえばおよそ大家と称される建築家は、まれな例外を除いて、いやらしく悪どくがめつく、そして他方では洞察力にみち先天的に有能でゆたかな知的蓄積をもち、少なくとも見かけは礼儀正しい人格者なのである。ここで本音と建てまえとは明確に区別され、建てまえは完全には実現されることはありえないと知りながら、それを否定しては建てまえにはならないことを十分に知っている人間は、大家となる条件のひとつのようにみえる。

こういう意味では松本興作は、建築エリートの辰野金吾に師事したけれど、エリート・コースを歩いたわけではなく、内側からそれを見ていたにすぎない。しかし社会への貢献とか優れた建築を目指してのひたむきな心、そして帰属企業への忠誠とそれに伴う経済発展という観点からすれば、彼はたしかに建築の歴史の上にひとつの足跡を残したのである。

建築創造は、しばしば建物や建築家を通してのみ語られる。明治四十四年の三月十四日に、楊枝といわれた歯ブラシに塩をつけて歯を磨いたなどと、本人も第三者も決して記録をしない。またその日の午後、カフェ・プラタンの階段をひとりの男が麻雀パイをかかえて上っていったことと建築思想とかかわりあいがあるなどと、建築史家は書きはしなかった。多分それはそれですむのかもしれない。

私はかつて久能山東照宮で、家康が使っていたというちびた一本の鉛筆を見た。それは家康像を語るに見落としてかまわないものであるかもしれない。しかしそれを通して家康像を語りうるのもまた事実である。一読すると松本興作さんは、この一本の鉛筆に等しいことを語るかもしれない。そして建築と直接にかかわりあいのない一言を付け加えることによって、松本興作さんの証言は現実味を増してくるようみえる。また一本の鉛筆の存在が、家康の外交・政治・趣味・生活態度などの反映であることと思うとき、この証言は松本興作さんの単なる個人的な語りではない。明治建築と現代建築をいかに理解したらよいか、これはその糸口を与える歴史的契機についての生々しい証言なのである。またこれは、海の風景もシルクハットも長靴もあり、今はもう亡くなった有名・無名の数々の人々が重なりあった建築の姿を映し出していると思う。

なおこの中には、通説とは違っていたりジャーナリズムでは殊更に省略されていたと思われる部分がある。これをもって松本さんの話に疑問をもった人がいると聞いている。しかし事実はそう簡単ではない。この食い違いと省略こそ、日本建築界で殊更に埋没されていた問題点であり、近代以前から近代に至る日本建築史の体系化を困難ならしめていたひとつのものだと私は思う。そして事実上は、わが国最初ともいえるべき民間の建築設計事務所、すなわち東京市京橋区日吉町の仕舞多屋の二階の柱や土壁や畳やガラス戸などを手でふれて知っている現存の人は、この松本興作さんただひとりなのである。

私はまだその日のことを思い出すことができる。昭和二十年五月二十五日金曜日、この日も初夏の晴れた日だった。その夜東京ではB29二百五十機余による空爆が始まったのである。二十二時四十分空襲警報が発令され、二十三日十五分無数の焼夷弾が、まるで花火のような美しさで東京駅付近に落下し始めた。最初は駅の降車口付近に、つづいて小荷物到着保管庫上に降り注ぎ、火は屋根裏、三階から二階へ、さらにプラットホームへと延焼し、その火災は手の施すべくもなく翌朝四時までつづき、鎮火したのは夜も明けた午前七時だった。東京駅舎は竣工後三十年にして無残な姿になり果てたのである。その頃の東京にとって一夜にして激変するドラマは日常茶飯事で、人々の目にはあまり哀しみはなく、奇妙な静けさが支配していたようにみえる。しかし実際には事態は確実に深刻化しつつあった。

すでに一か月まえの四月一日に米軍は沖縄本島に上陸し、ドイツ軍はつづく五月七日に連合国に対して無条件降伏し、わが国の状況は、もはや絶望的であることは誰の目にもとってよいほど明らかになっていった。そこで政府は神国不滅を呼号し神風特攻隊を発しながらも、他方では終戦という名の敗戦工作を始めていたのである。

この東京駅からわずか六百メートルほどの地の皇居濠ばたに、第一生命館なるビルがある。地上八階、地下四階の鉄骨鉄筋コンクリートの建物である。この建物はいつも濠の水に静かな影を映し、幸いなことに空襲の被害をうけることはなかった。

翌日は空襲などなかったかのように、空はあくまで澄み渡り、遠くには白い積乱雲さえ見え、風はまたさわやかだった。当時東京帝大の講師をしていた内田祥文は、「私の従妹は昨夜焼夷弾の直撃をうけて即死した」と、たんとんと私に語っていた。昨日死んだ人を嘆く人も、今日は嘆かれる人になるかもしれない時に、死はあまりにも静かな存在であった。そこにあるのは死の遅速のみであるという感じだけであった。そしてまた当時第一生命保険相互会社の社長・矢野一郎（一八九九生）の言葉を借りれば、「私が寝室として使っていた五階倉庫の外壁の出っばりには鳩が棲んでいて、いつも私と一緒に安らかにねむっていたが、その空襲の夜以来見えなくなってしまった。今もその頃の思い出のなかにあの鳩の、おだやかな眼が私には見えている」のである。とすると第一生命館の中にも何か起きていたのである。ただ建物は、何ごともなかったかのようにそれを包みこんでいたのにすぎなかったであろう。

戦争の始まった翌年の昭和十七年、このビルでは外面一階の窓にとりつけてあったホワイトブロンズの大格子が、取り外されることになった。当時、日本全国に行われた金属回収の政府命令によるものだった。数人の兵隊がトラックでやってきて、ハンマーでぶちこわし始めた。この格子はひっかけてあるにすぎないものだけれど、六畳敷きくらいもある大きさなので、運びやすいようにこわしていいのである。

その時、そのわきで小柄なひとりの男がこう頼んでいた。

戦争だから仕方がない。戦争で戦死する人がいるのだから仕方がないけれど、これは私にとってわ